



「生きていますごいんだ!!」 ～地域に子どもの権利を守る「居場所」を作る～

認定 NPO 法人・地域包摂こども支援センター「こどもの里」理事長 ^{しょうほ} 荘保 ^{ともこ} 共子 さん

講座5では認定NPO法人・地域包摂こども支援センター「こどもの里」理事長の荘保共子さんに「生きていますごいんだ!!」～地域に子どもの権利を守る「居場所」を作る～と題してご講演をいただきました。荘保さんは大阪市西成区釜ヶ崎地区で、地域の子どものために「こどもの里」を運営されています。

「こどもの里」は1977年に設立され、「釜ヶ崎で生きるこどもの権利を守る」ために、学童保育やプレーパーク、自立援助ホーム、ファミリーホーム、緊急一時保護、エンパワメント事業、訪問サポート事業など、地域に住む子どもたちや家庭の日常的なサポートを行っています。40年にわたって困難を抱えた子どもたちに常に寄り添ってきた荘保さんが、どのような思いで活動を続けてきたのか、子どもたちとの出会いを通して伝えてきたことは何なのかをお話しいただきました。

聴く
問題行動を起こす子は、「問題児」ではなく、「問題を抱えて困っている子」である子どもの「非行」は、人権侵害を受けた子どものSOSである。
このSOSをキャッチできる大人 寄り添う大人が必要
<聴く> 耳 十四 心

当日の映像資料より

○釜ヶ崎の子どもたちのきれいな目

荘保さんが初めて釜ヶ崎の子どもたちと出会ったのは、大学卒業後に行ったボランティア活動がきっかけだったそうです。釜ヶ崎の子どもたちは身なりがボロボロでも、「すごくきれいな目をしていた」ことに衝撃を受けられました。その後も釜ヶ崎の子どもたちとかかわり続けたいと思い、「子どもたちが遊びに来られる場所をつくりたい」と考え1977年に学童保育を始められました。

○子どもたちとのかかわりを通してみえた生活の「しんどさ」と、子どもの力は「生きる力」

子どもたちがごっこ遊びをしている様子から「(日雇いの仕事に) あぶれたよ」と言って帰ってくる親の姿があることや、「お腹が痛い」といって行事を休む子どもの背景には、お弁当を持って行くことができない貧困状況にあることに気づかれていきました。子どもたちはどんな環境であっても与えられた環境を懸命に生き、どんな親であっても親を困らせないために、知恵を絞りながら生きている子どもの姿を通して、子どもたちが抱えさせられている「しんどさ」とどんな環境でも子どもたちが生まれながらに持つ「生きる力」を発揮しながら生きていく様子をお話しいただきました。

○「包摂的な子どもたちの支援センター」を各地域に

様々な生きにくさを抱えた子どもたちがいたときに、保護をする場が児童相談所であると住んでいる地域を離れなければなりません。講座を通して、すべての子どもたちの生活圏にこどもの里のような「包摂的な子どもたちの支援センター」の役割を担う場をつくっていくことが、子どもの人権を守ることにつながるのではないかと考えることができました。

【参加者の声から】

- 子どもの貧困が、どのように人権にかかわってくるかよくわかりました。当たり前を守られるべき人権が侵害されないよう、居場所を作っている荘保さんの活動が、もっと周知できるといいなと思いました。
- 問題行動を起こす子は、「問題児」ではなく、「問題を抱えて困っている子」である。子どもの「非行」は、人権侵害を受けた子どものSOSであるという言葉が印象に残りました。問題行動を起こす子の心の裏に何があるのか、そこに耳を傾け、SOSをキャッチして寄り添っていけるようにならないといけないと思いました。
- 日々の保育の中で出てくる行動・言動などから家庭の様子や子ども自身の様子を読み取っていくことが保育士として求められていることなのだなどと改めて感じる事ができました。「わたしは生きていいよ」この言葉を大切にこれからも保育していきたいと思えます。